

〈書評論文〉

イスラーム世界のジェンダーに関する研究——日本の現状と展望——

嶺崎 寛子

はじめに

本書評は、日本で出版されたイスラーム世界のジェンダーに関する研究を、ジェンダー研究のなかに位置づけて整理し、特徴的な論考をとりあげて書評を試みるものである。当初、評者は加藤博編『イスラームの性と文化』の書評を依頼されたが、本書評では複数の研究を取り上げる。イスラーム世界のジェンダーに関する研究全般を対象とするのは率直に言うと、評者にはいささか荷が勝ちすぎる。しかしイスラーム世界のジェンダーに関する研究や論説等が出版されてはいるものの、それがなぜか当該地域への理解や研究の深化には必ずしもつながっていないという日本の現状を踏まえると、ここで先行研究を振り返り、整理しなおす必要があると考え、この方法を採用した。本書評では加藤が採用している「言説」と「実態」という分類を援用し、広くイスラーム世界のジェンダーに関する研究を「言説空間に関する研究」と「イスラーム世界の現象に関する研究」とに分類し、それぞれの研究を紹介、整理する。書評の対象は主に、ジェンダーに関連した単著ないし編著のある研究者の研究とした。なお敬称はすべて略すことをご了解いただきたい。

1. 言説空間に関する研究

言説空間に関する研究といえば、まずエドワード・サイード (Edward W. Said) の『オリエンタリズム』を挙げなければならない。サイードは東洋に関する知を産出する西洋の態度、まなざしを問題化し、「オリент」が地理的区分を示すたんなる名称ではなく、西洋による政治的、文化的構築物であることを指摘した。同様にチャンドラ・モハンティ (Chandra T. Mohanty) は「フェミニズム研究と植民地主義言説——西洋の目」で、西洋のフェミニズムが第三世界の女性たちを分析・表象する際の偏向を指摘し、西洋フェミニズムの第三世界の女性に対する姿勢を批判している。

モハンティ、ガヤトリ・スピヴァク (Gayatri C. Spivak)、トリン・T・ミンハ (Trinh T. Minh-ha) らの「ポストコロニアル・フェミニズム」の系列に位置づけられるイスラーム世界のジェンダー研究としては、応答責任や西洋フェミニズム¹のまなざしにひそむ加害性に真摯に向き合おうとした岡真理の仕事が挙げられる。文学研究者たる岡は一貫して表象の問題、特に第三世界に対する西洋フェミニズムや「私たち」のまなざしを問題にする。そして「同じ女」として第一世界の女性が第三世界の女性たちと自分を同一化することの罨と、第三世界の女性たちに対する第一世界の女性たちの構造的な加害性に自覚的であるように促す。

以下では長くなるが、岡の『彼女の「正しい」名前とは何か』について整理したい。本書のなかで、岡は私たち、という表現を多用する。私たちと複数にされてしまうことで、読者たる我々は岡のテクス

トによって否応なく、岡と同じ立ち位置に立つ人間という属性を付与され、「私たち」の中の差異は不可視化されてしまう。

「私達のアラブ人姉妹」(岡 2000、p.159)と岡が書くとき、それはシスターフッドという「幻想」に岡もまた立脚していることを示してはいないか。何をもって、いつ、私たちは姉妹になったのだ? そもそも私「たち」とは誰なのだろう? 評者はいつ、どのような理由で、岡と同列の何者か——「たち」という言葉に回収される何者か——になってしまったのだ? 姉妹や私たちという共同性や擬似的親密性をなぜ、ここで岡は無批判に導入しているのか。それは岡が批判して止まない西洋フェミニズムと同じ姿勢ではないのか。

例えば、序章で描かれている岡が「出会い損ね」たパレスチナ人女性について検討したい。岡は「見知らぬパレスチナ女性とともに、彼女のベッドで過ごすことに」(同上書、p.9)なり、彼女の夕食の誘いを何度も断って眠った。朝、彼女が岡に言う。「マリ、よく見て。これがエルサレム、私達の町よ。私たちパレスチナ人は、この街に何千年も前から暮らしてきたのよ」(同上書、p.11)。そして彼女は獄中の夫に会いに出かけていく。これが出会いのすべてである。岡はその出会いを想起し、彼女を「女であることの痛みと民族であることの痛みを不可分なものとして生きる、ジェンダー化された民族的抵抗の主体たる一人の *filastiniya* [パレスチナ女性を表すアラビア語単数形]」(同上書、p.27)として翻訳する。しかしこのような翻訳それ自体が、岡が指摘するように名づけの暴力であり、代弁するという暴力と知の横領そのものではないだろうか。彼女に「正しい」名前などない。人には多様な側面と多様なアイデンティティがあり、だからこそ、人は複数の「名前」を持つのだ。ここで岡は、語れないものを語るというよりはむしろ、語られなかったものまで読み込む、というフライングをしているように評者には思える。岡は「私たちもまた、歴史的に透明化された自己の存在に不透明さを取り戻すことが絶対に必要」(同上書、p.31)としながら、本文中で自らの不透明さを突き詰めることはしない。

岡の関心はアイデンティティよりもむしろ、自らや第一世界の女性が社会的、構造的に占めている相対的な「位置」に向けられている。その姿勢は貴重な示唆を日本のジェンダー研究や読者に与える。評者もそこから多くを学んだ。しかし逆にそのことによって、岡自身が「何者であるのか」という問いは、相対的なものとして埋もれてしまう。しかし性暴力や植民地主義について語る時、語る主体がそもそも何者であるかとそのポジショナリティは、誰に向かって語るかと同様、もしくはそれ以上に重要であると評者は考える。だからこそ加藤秀一は性暴力に関する彼の優れた論文を「僕は強姦されたことはない」(加藤秀一 2000、p.22)というポジショナリティの表明から始めたのではなかったか。

評者は「イスラーム世界のジェンダーに関する研究」の書評、というテーマからいささか脱線した。しかし岡のテキストは評者にとって、このような脱線をさせるほどに意義のある、魅力的なものである。例えば「女子割礼」に対する西洋フェミニズムのまなざしと語られ方のなかの問題(それは日本のフェミニズムや開発学の抱える問題でもある)を、炙り出したその仕事は高く評価されてしかるべきである。

欧米で専門教育を受けた女性イラン人類学者、ズィーバー・ホセイニー(Ziba Mir-Hosseini)の『イスラームとジェンダー——現代イランの宗教論争』はイランのウラマー(イスラーム法学者)の声を紹介し、欧米のフェミニズムとウラマーとの対話を試みたという点で貴重な成果であり、ヴィヴィットな記述と対面調査の面白さに満ちた刺激的な研究である。シーア派のウラマーたちのジェンダー観とその可変性、歴史性を考える上でも貴重である。しかしウラマーの主張をどう読むべきか、という背景説明が充分になされないままに各論やエピソードに終始しがちで、全体の枠組みが不明瞭になっている点が

惜まれる。おそらく日本の多くの読者は、提示される事例を前に途方にくれるのではないだろうか。監訳者の山岸智子はこの点に自覚的であったとみえ、文献案内や訳者解題を付すなど、かなりの努力を払って読者の便宜を図っている。山岸のような視点がホセイニーにあり、事例や行為の意味とその分析にもっと注意が払われていたなら、彼女の研究はより完成度の高いものになっていただろう。

ホセイニーが取り上げているように、ウラマー達はサイドが指摘した「オリエンタリストたちのまなざし」に対する反論をしばしば試みている²。「イスラーム的なもの」やイスラーム世界を解釈する西欧の「まなざし」やオリエンタリズムに対する苛立ちは、評者のエジプトでのフィールドワークの知見によれば、ウラマーや知識人のみならず、一般の人々にもみられた。イスラーム世界からのこのような反論は当該地域内では一定の浸透力を持っているが、翻訳・紹介されることは稀である。この事実はグローバル化が進む世界における、不均衡な言説空間を反映している。しかし仮に彼らの発言をそのまま翻訳しても、彼らの思想や主張を理解することはおそらく困難だろう。イスラーム世界の思想文化に疎い日本人が彼らの思想を理解するためには、その背後にある思想や文化、文脈に対する理解が不可欠だからである。この点に気配りが行き届いた研究としては、ライラ・アハメド (Leila Ahmed) の『イスラームにおける女性とジェンダー』が挙げられる。歴史記述部分には事実誤認も散見されるものの、植民地主義とジェンダー、フェミニズムの関係を整理した良書である。特に分量のほぼ半分を占める第3章はイスラーム世界の近代とジェンダーを考える上での基本文献である。この研究も「ポストコロニアル・フェミニズム」の文脈に位置づけられる。

この他に、日本の「イスラームは女性を抑圧する宗教である」「イスラーム世界の女性は抑圧されている」等々のオリエンタリズム的な前提に立った論調に対する批判がみられる。これらの批判は批判対象を限定していないことが多く、また「イスラームは～である」といった本質主義的な言説になりやすいため、残念ながら建設的な批判であるとはいえない。私見では、それは問題設定そのものが孕む危険性に起因する事態である。「イスラームは女性を抑圧している」という、歴史性や地域性等の多様性を無視した本質論的な論調に対する反論は問題設定に引きずられた結果、「イスラームは実は～である」という、やはり歴史性や地域性を無視した形を取りがちである。そして学界や研究者をとりまく外的状況が、「イスラーム世界」という枠組みの中で議論することを求めていることが、このような議論から離れて、イスラーム世界のジェンダーを地域的にも歴史的にも多様なものとして描き出すことを一層困難にしている。

例えば『キリスト教世界の女性』や『仏教圏における女性とジェンダー』という題名の研究書を想像して欲しい。そのような題名の研究書が現在の日本で出版されることはまずないと評者は考えるが、それは当該世界のなかでの差異や多様性が十分に認識されており、そのような概論や総論が陳腐に聞こえる程に研究が進み、細分化していることの証左である。イスラーム世界のジェンダー研究は残念ながら、前述のような外的状況もあり、いまだにそのような総論を期待される立場に置かれている。しかし「イスラーム世界のジェンダー」という枠組みでは、イスラーム世界のなかでの地域性、歴史性、民族、階級等の多様性を十分に描き出せず、大枠しか提供できない。この枠組みにあらゆる研究が回収されてしまう事態は、イスラーム世界のジェンダー研究にとって幸せなことではない。このような単純化が起きる要因はいくつかあるが、その一つは、イスラーム世界の女性たちの置かれている社会的現実やジェンダー秩序そのものに関する、実証的な研究の量に限りがあることである。

2. イスラーム世界の現象に関する研究

以下では、「イスラーム世界の現象に関する研究」について整理する。片倉もと子の『イスラームの日常世界』『アラビア・ノート』等は入門書としては大変に便利な良書であるが、発行年が古く現在の社会状況を反映していない。大塚和夫は『近代・イスラームの人類学』の4章でジェンダーについて論じている。大塚の多くの論文は彼が主にフィールドワークを行った80年代のデータと、90年代の補足調査によって得たデータに拠っているため、ややデータが古い点が惜しまれる。しかしジェンダー研究の動向を踏まえた彼の分析は、日本で参照できる良質な中東研究のひとつであるといえる。清水芳見の一連の研究も、ヨルダンの農村のジェンダー規範やジェンダー秩序を考える上で有効な素材を提供してくれる。

トルコのジェンダーを専門にする中山紀子の研究は92-93年に行ったフィールドワークの成果をもとになされており、トルコの農村に関する豊かなフィールドデータに裏付けられている。中山は「『抑圧』を抑圧と直ちに断定することなく、なぜ、そのようなことが彼らによって実践されているかに注目すること」(中山 2005、p.24)が重要だと指摘する。中山は一貫して「聖」と「俗」にこだわりを見せ³、「イスラームはもっとも『俗』にまみれてみえる『性』を『聖』に通じさせる特徴をもつ」(同上書、p. 42)と指摘するが、原則的に「聖」と「俗」という二項対立そのものが存在しないシャリーア(イスラーム法)ないしイスラーム文化を、そのような概念で分析することは果たして妥当だろうか。前述の引用から、中山が性を俗にまみれているものと考えていることがわかるが、この前提は妥当なのか。例えばヒンドゥー教のタントリズムのように、「性」が「聖」と結びつくのは決して珍しいことではない。

また中山はトルコの一農村の事例をもって「筆者は、性がイスラームの最も核心的な特徴の一つであると確信している」(同上書、p.42)「性こそがイスラーム社会を理解する大きな手立て」(同上書、p.42)と指摘するなど、本質主義的な分析をしがちである。そのため、文化の可変性やダイナミクスを射程にいたした分析にいたっていない。大塚が指摘するように⁴、そのような断定のためにはより多くの研究を待たなければならないだろう。彼らの名誉概念や性的隔離といった性にかかわる規範および性的イメージが、メタ・レヴェル(当該地域の人々が普段意識してはいないが、従っている高次のルール)でどのような価値体系に基づいているのかまで掘り下げた整理・分析があわせてなされたなら、中山の貴重なデータはもっと生きてくるだろう。

現代イラン社会を専門とする中西久枝は『イスラームとモダニティ——現代イランの諸相』の6、7、8章でジェンダーに関する事象を扱っている。6章で中西はシーア派の著名なウラマーであるジャアファリ師の人権論を取り上げ、西欧起源の普遍的人権論とシーア派イスラームの人権論を、「人権」概念の歴史的背景、立脚点の相違を明らかにしながら比較・整理し「イスラーム的人権論が、西洋的人権論と決定的に異なるのは、男女の平等と信教の自由の2点」(中西 2002、p.165)だと指摘する。続く7章では女性雑誌を資料として、ポスト・ホメイニ期のイランのフェミニズムについて論じている。中西はイランのフェミニズムは「『宗教的』対『セキュラー』、『保守』対『リベラル』といった分類」で捉えるべきではなくむしろ「『フェミニズム』という本来西洋の概念の受容に対して、『保守的』なのか『進歩的』なのか」(同上書、p.181)の違いであると指摘する。

中西によれば、イランではイスラームの枠組みにのっとって女性の権利拡大を主張した方が受容されやすいため、近年女性雑誌は国家権力の外に置かれた改革派ウラマーと連携、「ウラマーの言葉を借りて主張を展開」(同上書、p.187)する傾向がみられるという。ちなみに評者がフィールドワークをしたエジ

プトでも同様の傾向が見られたが、エジプトでは女性ウラマーが出現しており、イスラーム言説の担い手としての女性が登場している点がイランと異なっている。8章では女性の進学率、就労、女性の社会参加等にも触れつつ、ヴェールが強制されている国々と、社会規範が厳しいためにヴェールを纏わないという選択肢が事実上ない国々、ヴェールの着用が個々人の選択に任されている国々の歴史的背景と状況を簡潔に整理している。中西の研究はイランの状況を考えるために必要な情報を提示するだけでなく、それをどう考えるべきかについての示唆にも富んでいる。

前述のようなオリエンタリズム的な前提に反論するために、イスラーム世界のジェンダーに関しては、研究者が書いた一般向きの「エッセイ」やムスリム女性の「語り」も多く出版されている。イスラーム世界は男女隔離が行われている地域が多いため、一般に男性の研究者は女性に関する調査を行いにくく、情報が得にくい。そして従来中東研究者に男性が多かったという背景を考えると、これらの本には情報としては一定の価値がある。しかし研究者の体験や知見が学問的手続きなしに語られ、読者の「イスラーム世界のジェンダー観」を左右するという事態には、その影響力の強さを考えあわせると、不安にならずにはいられない。これらの本の情報としての精度には当然ながらばらつきがある。たとえばイラクの匿名女性のブログを出版した『バグダッド・バーニング』は、アメリカ占領下のイラクの情報を得るための一級資料であり、イラクに対して「西洋」がもつ度し難いオリエンタリズムについて考えるための良書であり、一女性の占領下の生の記録でもあり、一読に値する。ファティマ・メルニーシー (Fatima Mernissi) の『ハーレムの少女ファティマ』も、モロッコ、フェズの1940-60年代の大家族の家庭生活と、その中で生きる女性たちを活写している。

『イスラームの性と文化』は、広くイスラーム世界のジェンダーの多様な実態についての、実証的な事例研究を掲載しているが、編者である加藤博のジェンダー理解について、指摘しておきたい。大塚が正鵠を得た批判⁹をしているため詳細には論じないが、加藤博は「〔ジェンダーは〕近年の流行りの表現を使えば、グローバル・スタンダードの有力な担い手の一つである。ジェンダーという言葉には、社会的役割に見られる男女間の差別的性差、さらには性差そのものを克服し、排除することへの意思がこめられているからである」(加藤博 2005、p.7)とし、グローバル・スタンダードとイスラームを対立するものと捉えた上で「『ジェンダーとイスラーム』はもう一つの〔グローバル・スタンダードとイスラームの〕戦いの舞台」(同上書、p.8)であるとする。ここで加藤博がジェンダーという言葉で表現したいものは、モハンティらが批判した西欧中産階級中心の「フェミニズム」の一潮流ではないか。ジェンダーは「たんなる生殖機能の差異というレベルを超えて、社会的に編成された知識や規範としての性別」(加藤秀一 1998、p.26)である。従ってジェンダーは文化によって可変的であり、日本におけるジェンダーとエジプトにおけるジェンダーは同じではない。従ってジェンダーが「グローバル・スタンダード」であることはない。加藤博のジェンダー概念は誤解であり、そのような誤解がイスラーム世界に関心をもつ人々の間に広がらないことを願う。

おわりに

結論すると、「イスラーム世界の現象に関する研究」は個々の研究に見るべきものは多くあるものの、充分な量の研究が蓄積されるに至っていないといえる。実証的にかつ本質主義に還元、回収されない分析がなされたバランスのよい研究が望まれるが、残念ながらこの水準の研究はまだ多くはない。事例研

究をつなぐ理論や分析枠組みを提供する試みが大塚らによってなされているが、これをもっと有機的に結びつけることができれば、イスラーム世界に関するジェンダー研究は新たな局面を迎えることができるのではないだろうか。

日本の中東研究は全般的に実証を重視し理論研究に遅れが見られるが、これは他の研究分野との連携の弱さが原因である。イスラーム世界のジェンダー研究に関して言えば、開発学や社会学等の他分野との連携を強化し、それらの成果も取り入れつつ、ジェンダー研究とのより一層の連携が望まれる。ジェンダー研究も、しかし岡が指摘するような「西洋フェミニズム」や「普遍主義的人権主義」に陥ることを十分に警戒しながら、中東研究と連携する必要があるだろう。

開発学に関連するすぐれた研究としては、鷹木恵子のマグリブ諸国におけるマイクロクレジットに関する研究や、桜井啓子のイランにおいて女子教育が普及した要因が、男女隔離規範と適恰な学校システムであったことを指摘した研究などがある。これらの研究や、村上薫のナムス（性的名誉）規範が女性たちの家外での労働にどのように作用したかについての研究は、イスラーム世界における開発を考える上で、有効な視座を開発学に提供しうる。このような研究を一層蓄積し、開発学との連携を深めることで、開発プロジェクト等にアカデミズムの立場から具体的な提言ができれば、開発学のみならず当該地域の人々にも資することが可能となる。近年中東研究全体で、他分野との連携に向けた積極的な取り組みが進んでいるため、この点の見通しは明るいと評者は考えている。

今後は、歪んだ言説やオリエンタリズムに影響をうけない「実証」研究が積み重ねられていくことが望ましい。本質主義的な分析や語りという陥穽におちいることを十分に警戒しながら、「イスラーム世界のジェンダー研究」は、イランのジェンダー研究や、シャリーアのジェンダー秩序、ジェンダーと制定法など、対象とする地域においても分野においても、軸線を多元化していくことが望ましい。イスラーム世界の内部のジェンダー、地域、歴史、階級、民族等々の差異を可視化し、個々の文脈の中でジェンダー規範やジェンダー秩序がどのようなもので、何によって、どう決定づけられているのかを、多様な研究方法であきらかにしていくことがまずは、求められている。

「イスラーム世界のジェンダー」という正体不明なブラック・ボックスに個々の事例を落とし込んでしまふことなく、差異を丁寧に微細に見ていくこと。そして、その事例を読むための個々の枠組みを同時に提供していくこと。次に、事例と先行研究とを集積し、そこからそれぞれの地域ごとの、ジェンダーやセクシュアリティに関わるメタ・ルールを炙り出していくこと。これらが「イスラーム世界のジェンダーに関する研究」に課せられた課題ではないだろうか。

そしてより重要なことに、イスラーム世界のジェンダー研究は、従来のジェンダー研究が十分に扱ってこなかったが、近年その重要性が認識されている研究の地平に対し、あらたな視点と可能性を提供する契機となりうる。日本の従来のジェンダー研究には、イスラーム世界に対する関心が薄く、宗教とジェンダーに関する研究においてもイスラームを射程に入れないという傾向があった。従来のフェミニズム、特にマルクス主義フェミニズムは、宗教が女性たちに与える肯定的な価値を理論化できずにきた。これに対し、近年マーサ・ヌスバウム (Martha C. Nussbaum) は宗教の役割を肯定的に評価することを提唱している。しかしこのような試みはジェンダー研究の中でもまだ端緒についたばかりである。イスラーム世界のジェンダー研究は、宗教が重大な意味を持つ世界におけるジェンダーのあり方や、宗教とジェンダーの関係について、重要な示唆をジェンダー研究全般に与えうる。宗教とジェンダーの関係を捉える理論枠組みを形成していくという、ジェンダー研究において今後不可欠な課題に対し、イスラーム世

界のジェンダー研究が与えるインパクトは大きい。

(みねさき・ひろこ／お茶の水女子大学大学院人間文化研究科博士後期課程)

注

- 1 岡の定義は「女性の多様性を無視し、先進工業社会の、民族的多数派、中産階級、ヘテロセクシュアルの女性の問題を、普遍的フェミニズムと規定するようなフェミニズム」(岡 2000、p.41)である。
- 2 オリエンタリストはそのまま翻訳されてアラビア語で「ムスタシャルキーン *mustashariqin*」と言う。一部のウラマーやエジプト知識人は東洋学者に対する不安と苛立ちをかくさず、彼らに反論する説法を行い、また書物を出版している。たとえば Muḥammad Yāshīn. *Rdud 'ulamā' al-muslimīn 'alā shubhāt al-mulḥidīn wa al-mustashariqīn, nd* (ムハンマド・ヤーシーン『ムスリムのウラマーによる不信仰者とオリエンタリストの懐疑への反論』)。
- 3 その姿勢は中山の以下の著作の題名に顕著に表れている。中山紀子『イスラームの聖と俗：トルコ農民女性の民俗誌』アカデミア出版、1999年。
- 4 大塚和夫 (2005)「加藤博編『イスラームの性と文化』(イスラーム地域研究叢書 6)」『イスラム世界』第65号、pp. 105-113、pp.105-106.
- 5 特に大塚和夫 (2005) の pp.111-112を参照されたい。

参考文献

- 大塚和夫『近代・イスラームの人類学』東京大学出版会、2000年。
- .「加藤博編『イスラームの性と文化』(イスラーム地域研究叢書 6)」『イスラム世界』第65号(2005)：pp.105-113.
- 岡真理『彼女の「正しい」名前とは何か』青土社、2000年。
- 片倉もと子『アラビア・ノート——アラブの原像を求めて』日本放送出版協会、1979年。
- .『イスラームの日常世界』岩波書店、1991年。
- 加藤秀一『性現象論』勁草書房、1998年。
- .「性暴力の『力』はどこからくるのか——セクシュアリティと権力をめぐる断章」武蔵野美術大学『武蔵野美術』第115号 (2000)：pp.22-27.
- 加藤博「イスラーム世界の女性——実態と言説の狭間で」加藤博編『イスラームの性と文化』東京大学出版会、2005年。
- 編『イスラームの性と文化』東京大学出版会、2005年。
- 鷹木恵子「マグリブ三国におけるマイクロクレジット普及の背景とその現状——『開発とシリンドー』の考察に向けて」加藤博編『イスラームの性と文化』東京大学出版会、2005年。
- 清水芳見「アラブ・ムスリムの家族と結婚——ヨルダン」片倉もと子編『イスラーム教徒の社会と生活』栄光教育文化研究所、1994年。
- 桜井啓子「イランの女子教育——イスラーム化の影響」加藤博編『イスラームの性と文化』東京大学出版会、2005年。
- 中西久枝『イスラームとモダニティ——現代イランの諸相』風媒社、2002年。
- 中山紀子『イスラームの聖と俗——トルコ農民女性の民俗誌』アカデミア出版、1999年。
- .「夫婦関係を盛り上げる仕組み」加藤博編『イスラームの性と文化』東京大学出版会、2005年。
- 村上薫「トルコの女性労働とナームス (性的名誉) 規範」加藤博編『イスラームの性と文化』東京大学出版会、2005年。
- リバーベント『バグダッド・バーニング』アートン、2004年。
- Ahmed, Leila. *Women and Gender in Islam: Historical Roots of a Modern Debate*. New Haven: Yale University Press, 1992. (ライラ・アハメド『イスラームにおける女性とジェンダー』林正雄、岡真理、本合陽、熊谷滋子、森野和弥訳、法政大学出版局、2000年)。
- Hosseini, Ziba Mir-. *Islam and Gender: The Religious Debate in Contemporary Iran*. Princeton: Princeton

- University. Press, 1999. (ズイーバー・ホセイニー『イスラームとジェンダー——現代イランの宗教論争』山岸智子監訳、明石書店、2004年)。
- Mernissi, Fatima. *Dreams of Trespass: Tales of Harem Girlhood*. Boston: Perseus Books, 1995. (ファーティマ・メルニーシー『ハーレムの少女ファティマ——モロッコの古都フェズに生まれて』ラトクリフ川政祥子訳、未来社、1998年)。
- Mohanty, Chandra Talpade. “Under Western Eyes: Feminist Scholarship and Colonial Discourses.” *Boundary 12*: 3 (Spring-Autumn 1984): pp.333-358. (チャンドラ・T・モハンティ「フェミニズム研究と植民地主義言説——西洋の目」『日米女性ジャーナル』No.15 (1993) : pp.91-116)。
- Muḥammad Yāshīn. *Rdud ‘ulamā’ al-muslimīn ‘alā shubhāt al-mulḥidīn wa al-mustashariqīn*. nd.
- Nussbaum, Martha C. *Women and Human Development: The Capabilities Approach*. Boston: Cambridge University Press, 2000. (マーサ・ヌスバウム『女性と人間開発——潜在能力アプローチ』池本幸生、田口さつき、坪井ひろみ訳、岩波書店、2005年)。
- Said, Edward W. *Orientalism*. New York: Pantheon Books, 1978. (エドワード・サイード『オリエンタリズム』今沢紀子訳、平凡社、1986年)。